

認知言語学的観点から見たスペイン語不完了過去⁽¹⁾

El pretérito imperfecto en español desde la perspectiva de la lingüística cognitiva

大森 洋子
Hiroko OMORI

0. スペイン語において過去の出来事を表す場合に二つの形がある。いわゆる直説法単純完了過去と不完了過去である。⁽²⁾ (以下完了過去, 不完了過去) 一般には完了過去は過去を表すと同時に完了相を持つものに対して, 不完了過去は過去の出来事を表すが同時に不完了相を持っているという形で述べられている。⁽³⁾ 話者がどのように事柄を捉えられているか, 視点をどこに置いているかなどによって, この二つの過去形が使い分けられる。特に, 完了, 不完了というアスペクトをどのように捉らえるかということが重要になる。そこで本稿では人間の認知の一般的な性質と関連させながら, 完了過去, 不完了過去の意味の対立において重要な役割を果たしているアスペクトということを中心に考察を進め, 不完了過去の基本的意味を探っていく。

1. まず最初に, 不完了過去の用法を整理し分析上の問題点を考察する。⁽⁴⁾

1.1. 不完了過去は過去の特定の一時点において何らかの行為が行われていたことを示すが, その行為の始発点, 終結点には言及しないというふうに説明されるのが一般的である。過去においてある出来事が起った時点での進行中の出来事・行為を表す時に用いられるのがその典型で, *copretérito* 又は *pretérito existente* と呼ばれている。

- (1) a. Me levanté y descorrí las cortinas. Hacía un día espléndido.
b. Cuando entraste, llovía.
c. Les he saludado cuando iba a la escuela.

第二に, 過去における習慣を表す場合がある, これを *Gili Gaya* は動詞固有のアスペクトが完了相を持つ場合に繰返し行為を表すとし, ここから習慣的な意味が得られるとしている。

- (2) a. Saltaba los obstáculos con facilidad.
b. Leía el periódico por la mañana.
c. Se afeitaba por la mañana.
d. Contestaba sin reflexionar.

これらは完了過去形 —*saltó, leyó, se afeitó, contestó*— がその行為の一度だけの遂行を表すことが可能であるということと対立する。

第三に, 不完了相というアスペクトから完結していない行為, 未完の行為を表す場合にも用いられるとしている。いわゆる *imperfecto de conato* としての用法である。

- (3) a. Salía cuando llegó una visita.

- b. Le dio un dolor tan fuerte que se moría, hoy está mejor.
- c. Me marchaba cuando has llamado.
- d. Llegó justo cuando arrancaba el tren.

これらの例では不完了過去で表されている行為がその態勢に入っているがまだその行為が終了していないと
いうことを表している。

以上三つの用法は全て過去の出来事について言及している。それに対して以下の例は過去の出来事に言及して
使われてはいない。

一丁寧表現として

- (4) a. ¿Qué deseaba usted?
- b. Quería pedirte un favor.
- c. Me proponía hablar contigo.

一条件文においての後件に現れる可能形 *-ría* の代わりとして、又前件に現れる *-ra, -se* 接続法過去形の代わり
として

- (5) a. Si tenía dinero, compraría (compraba) esta casa.
- b. Si esto fuera así, resultaba que los tontos no lo eran tanto como parecen.

一仮説未来 (*futuro hipotético*) として、特に幼児言語の中で用いられる。

- (6) a. Yo era la princesa, tú eras la reina.
- b. Este era el ladrón y nosotros éramos los guardias.

一驚きを表すような場合に用いる。

- (7) a. ¿Pero estaba usted aquí?
- b. ¿No querías hablar conmigo?

一完了過去との対立関係を失くして、すなわち完了、不完了というアスペクトの対立を相殺したかたちで用い
る場合 —Gili Gaya (1981) は—*Como se trara de un tiempo relativo, la limitación temporal que pueden
señalar otros verbos o expresiones temporales que le llegan a veces a anular su carácter imperfecto*
(124)

- (8) a. Al amanecer salió el ejército, atravesó la montaña y poco después establecía contacto con
 el enemigo.
- b. Nacía este personaje un trece y martes en el seno de una familia humilde.

これらの例では文体的な効果という点において異なっているが先に挙げた三つの基本的な用法において見られ
た不完了相としての意味はない。

以上、不完了過去の用法をまとめ、その基本的な意味に過去の出来事に言及すること、不完了相を持つことと
仮定すると、最初に挙げた三つの用法が基本となり、その他はこの基本的意味のどちらか一方のみを持つ派生的

な用法と言えよう。

1.2. ここで1.1. で挙げた例の考察を進め、不完了過去の意味について探る指針としたい。

(1) から (3) の例の意味の違いはどこから派生するのか。それぞれどういう点で不完了相という意味と関係するのか。(1) において不完了過去で用いられている動詞、述部の性質を見てみると —llover, hacer un día espléndido, ir a la escuela— 状態、ある一定の時間持続する出来事を表していることが分る。これらの動詞を例えば瞬時動詞と替えると copretérito としての意味は生じず、conato として解釈される。—Cuando entraste, yo salía. conato として解釈される文では基準となる時点のある時間的広がりのある表現に替えることによって習慣的な意味が得られる。—Salía (de casa) temprano por aquel entonces. (2) において時間的な広がりがないコンテキストに置くとき瞬時的な意味を持つ動詞、例えば saltar は conato として解釈され —Saltaba el último obstáculo cuando lo vi, 継続的な意味を持つ動詞、例えば afeitarse は copretérito として解釈される —Se afeitaba cuando lo vi

このように動詞固有のアスペクト、モード・デ・アクションが深く関わってくるのが分り、不完了過去を論じる場合は動詞個々の意味の分析が不可欠であることが分る。

また、不完了相を持つと言った場合は、同じように不完了相を表す形として定義される (cf. Langacker) 進行形 (estar + 現在分詞) —特に過去進行形との関係が問題になる。⁽⁵⁾ estar が完了過去で用いられる場合において進行形は完結的に捉えられるものを非完結的に捉える手段 (- (8)) から完結的に捉えられる行為がある限られた時間空間の中で継続している (均質的に続いている) ことを表す手段 (- (9)) に変わる。estar が完了相を持つことになるからである。

(9) Yo estaba hablando con los vecinos cuando llegaron los bomberos.

(10) Estuve hablando con tu hermano dos horas.

つまり、時間的広がりを持つ形で出来事、行為を表すことになる。従って動詞固有の意味が時間的広がりを持たない動詞の場合には過去進行形を持たない。

(11) *Estuvo llegando a la meta.

*Estuvo encontrando el dinero.⁽⁶⁾

進行形によって不完了相を表すと言った場合と不完了過去によって表される不完了相と言う場合においてその不完了相とはそれぞれ異なる意味で解釈されていることが分る。

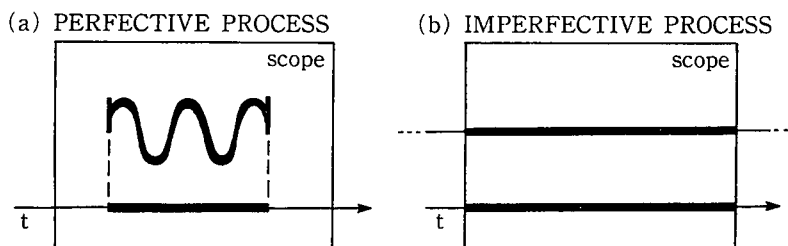
そこで不完了過去が何を意味するのかについてを考察していくために、動詞のアスペクト上の意味—モード・デ・アクションとどのように関わっていくのか我々がそれをどのような形で見ているのか—それによって色々な意味が生じる—を観察し、不完了を表すと言った場合我々はその出来事をどのように見ているかということを論じ、さらに派生的な用法—過去に言及しない等—についてとの関連性を中心に分析を試みる。次節では分析の枠組みとして用いる認知文法について何故それを用いるかについての妥当性、基本的概念等、そして本稿で用いる動詞のアスペクトについてを概説する。

2.1. 前節で概説した不完了過去の用法を見ていく場合に重要なことは過去における行為をどのように捉らえていくかということになる。形式的意味論においてはこのような語用論的な現象を言語研究の対照としていないのに対して、近年言語は人間の認知能力の一つであるという考え方から、言語事象を人間の認知の方法の一般的な

性質の関連させて論じる傾向が見られるようになった。異なる言語形式を用いればそこには異なった概念化 (conceptualization) を行っているとする。従って、不完了過去の意味を考えるにあたって我々がどのような概念化を行っているのかを見れば、完了過去形との違いをより明確化出来るものと思われる。

Langacker (1987, 1991) は意味とは広い意味での概念化であり、それは認知の領域においてある部分が顕在化するという形で捉えられるとしている。例えば、指というのは手という認知領域の中で、また弧というのは円という認知領域の中でその一部が顕在化していると考えられると説明している。名詞の意味 (陳述として定義する) は物を指し、動詞、副詞、前置詞の意味は関係概念を示すことにあると考える。関係概念とは複数の entity の間の関係を顕在化している場合を言う。関係概念において最も中心的な物として捉ええられるものを投射体 (trajector) と言い、その投射体を位置付けるための基準となるものを標点 (landmark) としている。例えば *El gato está debajo de la mesa* においては *el gato* が投射体、*la mesa* が標点と解釈され、その関係を表しているのが *debajo de* という関係陳述であるとしている。動詞とは他の関係陳述とは異なって時間軸上で解釈される。つまり過程 — process という概念を表している。故に、過程は時間的な流れにそってその投射体と標点との関係を表し、不完了として解釈される過程とはその関係が顕在化された時間軸上において均質的に捉えられるのに対して、完結的であると解釈される場合には投射体と標点の間の関係が一つ一つの段階において変化がある形で捉えられる。これは次のような形で示される。

(12)



このような形で顕在化された過程は時間軸の中で発話時点を中心に位置付けられる。

我々はある物を見る場合にある部分他よりも際だって見える (捉えられる) ことがある。より緊密な部分の方がその周りよりも、動いている物の方が静止している物よりもある単位として捉えられやすい。このような場合により中心的に捉えられる物を図 — figure, より周辺の物として捉えられる物を地 — ground であるとしている。⁽⁷⁾ さらに、我々が物のどの面を見ているか、どのような視点で物を捉えているか等も概念化に大きく影響しているとする。

このような点を踏まえて不完了過去が出来事をどのように概念化した結果なのかということを第3節で論じる。

2.2. 第1節において不完了過去について論じる場合において、動詞の固有のアスペクト、モード・デ・アクションが密接に関わってくるを見た。ここでは非常に曖昧な形で用いてきた動詞の固有のアスペクトについて Vendler (1967) の分類に基づいて定義しておきたい。

第一に進行形で用いられるか否かで分類される。**Yo estoy sabiendo la noticia.* (cf. *Yo estoy escribiendo cartas.*) 第二に進行形で用いられる動詞 (句) の中でそれが終結点を必要とするかしないか (telic, atelic) によって分類される。例えば、*dibujar un círculo* では一つの円が描かれてはじめてその行為が成り立つのに対し

て, *correr, cantar* 等はそのどの側面を取ってもその行為は成り立つ。前者を *accomplishment*, 後者を *activity* と呼んでいる。これらは *He corrido una hora* と言えるのに対して, **He dibujado un círculo una hora.* とは言えず *tardar* を用いて表すという違いがあることから分る。さらに, —しているという進行形で使えない動詞(句)は一つの時点に言及しているのかそうでないかによって分類される。一時点に言及する場合はある別の状態への突入を意味する動詞(句) *empezar, terminar, llegar* 等がある。ある時点への言及をしていない場合には状態を示す。前者を *achievement*, 後者を *state* と呼んでいる。前者は *¿A qué hora...?* という質問の答えとして用いられることが出来るのに対して後者の場合には不可能である。

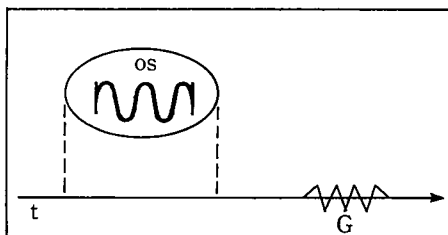
Langacker の *perfective, imperfective* という観点からこれらの分類をみると, *perfective* とは投射体と標点の関係が時間を追うごとに変化している場合であるから, *accomplishment, achievement* 相当する。*accomplishment* の場合にはその一つ一つが顕在化れるのに対して, *achievement* の場合にはその到達点のみも顕在化されていると言える。逆に, *imperfective* の場合にはその投射体と標点の関係が均質的であるということで, *state* と *activity* が相当する。瞬時的であるか否かが重要な役割を果す場合があるがこの場合は *achievement* と解される動詞(句), 及び *accomplishment* と解される動詞(句)がその遂行に時間的広がりが必要としないように捉えられる場合である(*accomplishment* の下位分類)であるということに注意しておく。

3. 第3節ではそれぞれの具体的な例を見ながら, 不完了過去形で表される出来事概念構造とはどのように表されるのかを完了過去形, 又過去進行形と比較しながら論じていく。

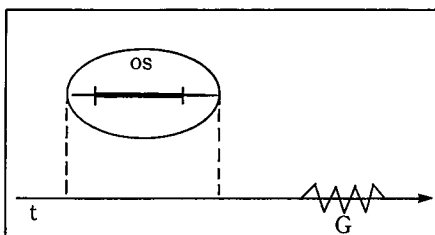
3.1. 顕在化された過程 (*profiled process*) を現実という領域の中でどこに位置付けるかということにおいて時制という概念が関係してくる。例えば, 現在形とは発話時点とぴったりと一致するかたちで顕在化された過程が実現することを意味する。⁽⁸⁾ 過去形を考える場合にスペイン語の場合はアスペクト—完了, 不完了—が関与してくる。このアスペクトの対立はどのように扱われるべきなのだろうか。完了過去の場合には顕在化された過程が発話時点よりも前に実現されていることを表すと考えてみよう。そうすると,

(13)⁽⁹⁾

a



b



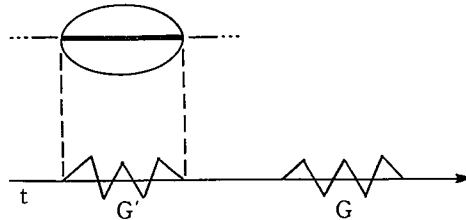
と表されるだろう。つまり, 始発点, 完結点が明確にされているということがその特徴となる。*estar* の完了過去形 + 現在分詞という進行形にした場合に, この始発点から完結点までの行為が均質的に続いているということを表すことになるから, *achievement* と解されるような動詞(句)が進行形で用いられないことを説明する。(完了)過去進行形は *perfective* と解されるものに *imperfective* としての解釈を与えることであり, (13b) のように表されることになる。*state* と解される動詞は元から (13b) と表されるわけで進行形にならないことが自動的に説明される。

一方、不完了相を担っていると定義される不完了過去はもう少し複雑である。不完了過去はある過去の一点を基準にしてそれとの同時性が問題となる。このことを明確に説明するのが時制の一致の場合に現れる不完了過去である。

- (14) a. Dijo que su padre estaba enfermo.
 (-Dice que su padre está enfermo)
 b. Me di cuenta de que debían volver pronto.
 (-me doy cuenta de que deben volver pronto)

のように、主動詞が過去になる場合に従文の中で用いられる動詞は原則として不完了過去が用いられる。この場合に *su padre está enfermo* という発話が行われた時点 (G' とする) に位置付けられる顕在化された過程が *su padre está enfermo* ということである。(これは現在形が用いられる場合に平行する) しかし G (現在の発話時点) から見ると過去の領域に属し次のように表される。

(15)

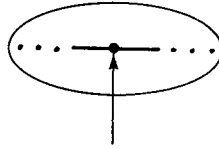


ここで G' の意味を考えてみよう。 G' をもう少し広く解釈し、過去における何らかの過程を表す時間上の標識と考えると、不完了過去は (15) のように表されると言えるだろう。つまり、 G' にある過程が一致する形で起っており、その過程の始発点、終結点を含まない。 G' は何らかの過程を含意し、従ってその性質を考えることによって色々に解釈される可能性を持つ。瞬時的に捉らえなくてはならない場合もあるだろうし、時間的広がりを持つ形で捉らえなくてはならない場合もある。それによって顕在化された過程の認知の基盤となる領域の大きさが変化する。しかし、 G' が実際には時間的な広がりを持つように解釈される場合でも不完了過去において標識として機能する際には常にその顕在化された過程の一部分を占めると理解される一点的に解釈されることになる。このように考えることによって不完了過去に色々な解釈が生じることが説明されよう。そこで G' がどのように捉らえられるのかについてを具体的な例を見ながら考察を進めていき、不完了過去の表す不完了相をどのように考えればよいかについてを論じる。

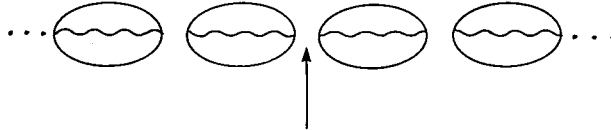
3.2. 第1節で例示した通り不完了過去を用いる典型的な例は *copretérito* として解釈される場合である。Cuando me llamó por teléfono, leía el periódico. を考えた場合に cuando... という部分が過去のある一点 G' と見なされ、llamar por teléfono は accomplishment であり、perfective として捉らえられる。限られた時間 (G') において同時に起っていると考えられる行為 leer el periódico は activity と見なされるから……している、と解釈される。しかし、もし En la juventud leía el periódico todos los días のように G' と考えられる過去の一点が時間的な広がりを含意している場合には leer el periódico という行為を一つの行為としてみるのではなく、反復による連鎖上の一つの単位として捉らえる必要が生じる。より上位の次元で不完了的に捉らえられた過程の一つの構成単位ということになる。

(16)

a.



b.



と表される。つまり、その過程が反復されることになり、その結果習慣としての意味が得られることになる。¹⁰⁾これは過去の習慣を表す場合に G' が瞬時的であることを含意することが決してないということを説明する。Saltaba los obstáculos を cuando lo vi というコンテキストに置く習慣としての意味を失うのである。このように不完了過去で表されている過程が imperfective と解される場合に、G' が瞬時的な意味を持つ時には copretérito としての意味が、G' に時間的な広がりを持たせる場合には習慣としての意味が生じる。

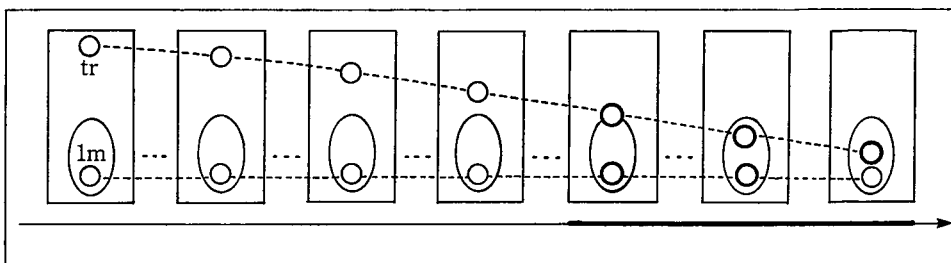
次に、perfective として解される動詞が不完了過去で用いられる場合を見てみよう。まず、accomplishment と見なされる escribir una carta という行為を不完了過去で使用すると G' がやはり瞬時的に解釈される時にその行為が完成に至る途中にあり、その一つの側面への言及ということになる。つまり、手紙が完成した場合にのみこの escribir una carta という行為が成り立つのだが、不完了過去で表されているために、完結点を表すことは出来ない。そのため通常の解釈ではまだその途中にあるということになる。これはある時間的な広がり前提とする場合で、imperfective の場合と同じような解釈が得られる。もし G' が時間的な広がりを含意するならば一つ一つの行為が単位となる解釈が可能であり、繰返しを表すコンテキストに置かれると習慣としての意味を持つ。

(17) ?En la juventud escribía una carta (cada dos días)

(17) では cada dos días というような繰返しを表すような表現がないと不十分である。

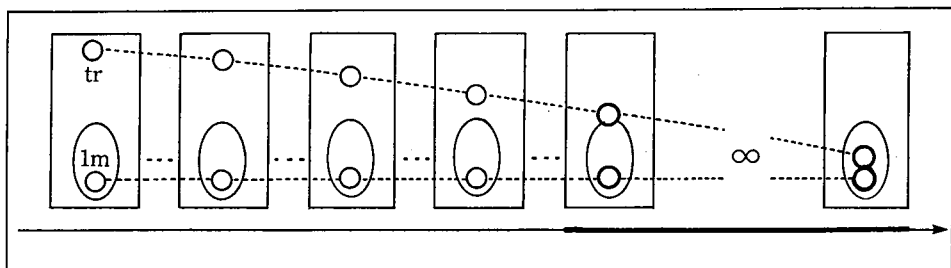
perfective と解釈される過程のうちその行為が瞬時的で、その動作の完結までの時間的経過が認知においてほとんど考慮されない場合 —disparar una bala, lanzar una flecha—, 又 achievement のような動詞 (句) が不完了過去で用いられる場合にはどうだろうか。これらはそれらの動作を段階的に考え、その一つの段階が G' として認識される過程と同時に生起していると考えられる。例えば、llegar a la meta という過程を考えると

(18)



というふうに表される。これが不完了相で表されているために、最後の段階を指すことは不可能である。また最初の段階に入っていることは前提とされる。さらに、その一つ一つの段階は不完了であるということによって均質的に捉えられなくてはならない。そのためにゴールへの到達を含意せずにその状態が永久的に続くというふうに考えられ、

(19)



のように表される。その結果—しようとしていたという *conato* としての解釈が得られる。この場合にも *G'* が瞬時的な過程を前提にしていることが条件であって、時間的な広がりのある過程を前提にしている場合には一つの過程が単位となり *G'* の中で無数に繰り返されていると捉えられ、習慣を表すことになる。

perfective と解釈される動詞(句)では実際上瞬時と解されるか否かが重要な意味を持ち、動詞固有の意味として継続相を持っている場合には *imperfective* と同様に考えることが出来るが、継続相を持たない動詞は *G'* が瞬時的な過程を含意している場合には *conato* としての意味、*G'* に時間的な広がりを持たせる場合には習慣としての意味が得られる。

状態を表す動詞(句)の場合にはどのように考えたらよいのだろうか。状態を表す動詞に特徴的なことは進行形は通常用いられないということであろう。Está conociendo al Sr. López. とは言えない。これは例えば現在における状況を表している—現在と認識している全てをカバーする形でその状況を述べているからである。不完了過去についても同じことが言えよう。つまり、*G'* をどのように捉えようと過去と認識される全ての領域内での状況を表していることになる。状態を表わす動詞(句)が完了過去形で用いられた場合には始発点、完結点をも含むことになり、現在との平行性が失われる。これは (13b) のように表されると述べた。しかし、

- (20) a. El supo la noticia.
b. Fue difícil resolver este problema.

のような例に見られるように動詞によって始発点, 又は完結点のどちらか一方を指すことがあるという議論が為されているが (cf. Guitart, 1978), これについて考察する。

3.3. Guitart (ibid.) によると例えば *saber, tener, gustar, ver* etc. は完結相を持つと (すなわち完了過去が用いられると) 始発点がより強調される。

- (21) a. El supo la noticia (*pero ahora no sabe)
 b. Juan tuvo un regalo. (= Recibió un regalo)
 c. Le gustó el lugar y decidió quedarse.

次の例が示すように *costar, poder* 等は完結相を持つと終結点にその注意が向けられる。

- (22) a. El libro costó 1000 yenes.
 b. El pudo ver al profesor.
 c. El tuvo que hablar con el profesor.^[1]

始発点・終結点のどちらにも言及することの出来る動詞, 例えば *estar, ser* もある。

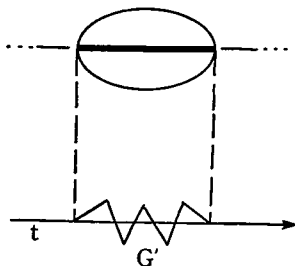
- (23) a. Ese chico fue alumno de este instituto a los quince años.
 b. El fue alumno de este instituto durante dos años.
 c. Estuve allí dos semanas.

これらの動詞の特徴を見てみると, *saber, conocer, gustar* は何らかの動作・行為を前提とし, その結果としての状態を表していると言えよう。それらの動詞が完結相で用いられるとその状態に入ったということに関心が集まる。その結果の状態の終結を考えることは困難である。そのために始発点に言及する動詞ということになる。一方ある物の状態・性質について言及する *costar, poder*, 等は完結相で用いるとその性質が何らかの形で終結したというふうに解釈する方が自然である。その物の固有の性質等を表しているので始発点を考えるのはあまり意味がない。*ser, estar* はそれ自身の語彙的意味が弱いため他の要素, コンテキストによってどちらか一方の意味を持つと考えられるだろう。

このように状態を表す動詞 (句) は状況・性質等を述べるのを特徴としており, これを完結相で捉らえるとそれぞれの動詞の特徴によって又コンテキスト等の語用論上の要因によって始発点・終結点へ注意が向けられることになる。^[2]

3.4. さて3.1-3.3では不完了過去の意味をどのように考えるべきかを具体例をみながら考察してきたわけだが, ここで完了過去との違いを別の観点からみていくことにする。不完了過去で表された過程を分析する場合に常に G' を位置付けることが必要で, その G' 全体をカバーする形で不完了過去で表された過程が記述されることになる。

(24)



さらに、過去の領域内を越える形で広がっていくことを推論することも可能である。(始発点、終結点を含まない)

これを図と地という観点からみると、よりまとまりのあるもの(広がりがないもの)が図と認識される訳だから、完了過去及び不完了過去が用いられた場合に前者が図として、後者が地として認識され易い。これは我々が不完了過去形を理解する場合に必ず G' となる何らかの行為を基準にして理解すること、逆に完了過去における過程を理解する場合には背景を過去において出来事を追っていけることを説明出来よう。背景があれば何らかの図を考えなくてはならないのに対して、図があれば語用論的にそれを何らかの背景の中に置いて解釈が可能である。

このことは不完了過去が背景を記述するのに使われ、完了過去が出来事を表すのに使われるという一般的な説明を裏付けていると考えられる。時間を表す場合には必ず不完了過去を用いること — *Eran las cinco* — を明確な形で説明する。不完了過去が用いられることによって、何らかの行為が起ったことが前提となり、背景的な役割を果たしているからである。同じように *Graciela Reyes (1990)* の例 — *Ayer moría Borges en Ginebra* — ニュースの見出しとして — も、*ayer* という日全体を不完了過去を用いることによって、背景化しそのなかで色々な出来事があったことを含意しながら、それらを全く表さないことでその日の特徴付けるような効果を出している。

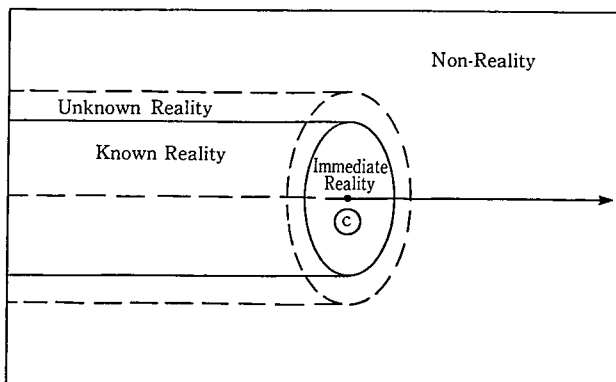
以上、3節において不完了過去をどのように見るかを考えてきた。完了過去が顕在化された過程が発話時点よりも前に全て実現されていると定義されるとすると、不完了過去は不完了という点の特徴づけられる。まず第一に、その顕在化されている過程は過去の領域にある G' において均質的であること、即ち無限的な広がりを考えることが可能である — *unbounded* である — こと、さらに G' と同時に生起していることが必要で、 G' の設定が不可欠である。そしてこの G' が実際にはどのような過程を含意しているかによって不完了過去における色々な意味が生じることになる。

4. これまで不完了過去の基本的意味についてを見てきたがここではその他の用法についてどのように考えればよいのかについてその研究の方向性を示唆しておく。¹³⁾

我々が物を認識する場合に明確にそれを定義出来るかというとき常にそういう訳ではない。実際には典型的なものとしてそうでないもの、周辺的なものがある。例えばカテゴリーはそのカテゴリーを特徴付ける属性を過不足なく有しているメンバーとそうでないもの、プロトタイプとその周辺的なメンバーとが考えられ決して均質的な形で定義することは出来ない。そしてその周辺的なメンバーはそのプロトタイプの持つ特徴をどの程度備えているかによって関係づけられる。ここで不完了過去を 1 現在より以前のある時点に起る過程と同時に起っている過程を顕在化する。2 そこで起っている過程は均質的な形で捉えられる、という二つの特徴で定義すると、この二つの特徴を過不足なく兼ね備えている場合に不完了過去のプロトタイプと考えられ基本的意味が説明され、それに対してこの二つの特徴を何らかの形で十分には兼ね備えていない場合にはより周辺的な用法という形で捉えられることが出来よう。

現在・過去という対立に対して現実・非現実という対立を考えると、前者が時間軸上の距離、後者が認識上における距離ということになり、

(25)



というふうに表される。過去が発話時点から見て現在よりも遠くとして認識され、現実、非現実の対立では非現実が発話時点からより遠くであるというふうに認識される。過去と非現実におけるこの共通性が過去形を非現実、仮定として用いられることを説明している。これらは過去の出来事に言及していないという点でそのプロトタイプから外れることになる。又、3.4. で例示した *Ayer moría Borges en Ginebra* というような文においては均質的な形では出来事を捉らえていないという点でそのプロトタイプからは外れていることになる。しかしどちらの場合にも上に挙げた二つの特徴と何らかの形で関連性があり、それが不完了過去を用いる根拠となっていると考えることが出来る。

このような見方はテンスとモード、さらにはアスペクトとの関連性をも示唆していると考えられ、今後の研究の課題となろう。

5. 不完了過去には幾つかの用法があるがそれらの中心となるその基本的意味は何かについてを見てきた。基本的意味としては 1 過去のある時点に起っている出来事、2 その出来事を均質的に捉らえている、という二つの特徴を考え、実際に用いられている動詞の固有のアスペクト、モード・デ・アクション、そして過去のある時点 G' がどのような過程を含意しているかによって不完了過去の基本的な意味 ((1)-(3)) が、この二つの特徴を何らかの形で欠いているとより周辺的、派生的な意味 ((4)-(8)) が得られると説明される。これらの用法を関連付けるのは我々がどのように物を捉らえているかということである。

注

- (1) 本稿は1991年5月19日、上智大学で開催された日本ロマンス語学会第28回大会での口頭発表の内容をもとに考察を進め、大幅に修正を加えたものである。
- (2) *pretérito perfecto simple* を完了過去、*pretérito imperfecto* を不完了過去として用いる。
- (3) 完了過去・不完了過去についてはアスペクトの対立に基づいて説明する立場 (Alarcos, Bull, etc.) とアスペクトの対立を認めない立場 (Rojo) の二つがある。確かにスペイン語にアスペクトというカテゴリーを独立して存在しているかどうかというのは議論の余地がある。しかし完了過去・不完了過去の意味を考えるにあたってアスペクトという概念は非常に重要であると思われる。そこで本稿ではアスペクトの対立があるという立場にたって論を進める。
- (4) 例は Gili Gaya (1981), Esbozo (1973), Porto Dapena (1987) から抜粋。

- (5) Langacker (1982) において進行形とは perfective である過程を imperfective として捉らえる手段として定義している。
- (6) 動詞の種類によっては繰り返しを表して用いられる場合がある。
- (7) 図と地は普通は投射体と標点と一致している場合が多いが必ずしもそうであるとは限らない。
- (8) 現在についてもその領域をどのように解釈するかによって色々な意味が生じる。発話時点のみを考えるか、より大きな領域を考えるかによって進行中の出来事、又は習慣を表したりする。
- (9) 顕在化された過程は発話時点 G から見てどこに位置されるか、そして太線は顕在化された過程、楕円はその過程を解釈するための基盤となる領域を表している。
- (10) Langacker (1991) では個々の過程がそれぞれより上位の次元で不完全的に捉らえられその様な形で世界が構造化されているという structured world model という概念に基づいて説明し、その structured world model をどのように解釈するかによって習慣としての意味、総称的な意味等を持ち得るとしている。
- (11) 法助動詞 poder, tener que, deber 等はその意味から言ってその状況に言及することになる（話者の発話に對しての態度を示す）が、完了過去で用いられるとその法的な意味が弱くなることが観察される。
- (12) 従って、上記の動詞のコンテクスト等の影響によって通常とは異なる解釈が可能な場合がある。例えば、tener は Tuve muchas visitas por la mañana というような場合には終結点に注意が向けられていると考えられる。
- (13) Graciela Reyes (1990) では引用という働きからこれらの派生的な用法を説明している。

参考文献

- Alarcos Llorach, Emilio. "Sobre la estructura del verbo español", en *Estudios de gramática funcional del español*. Madrid: Gredos, 1982 (3ª ed.)
- . "Otra vez sobre el sistema verbal español", en *Estudios de gramática funcional del español*. Madrid: Gredos, 1982, 3ª edición.
- Bull, W. E. *Time, tense and the verb. A study in theoretical linguistics with particular attention to Spanish*. Berkley: Univ. of California Press, 1960.
- . *Spanish for teachers. Applied Linguistics*. New York: The Ronald Press Company, 1965.
- Butt, John y Benjamin, Carmen. *A new reference grammar of modern Spanish*. Londres: Edward Arnold, 1988.
- Comrie, B. *Aspect*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Fernández Ramírez, Salvador. *Gramática española 4, El verbo y la oración*. Madrid: Arco Libros, 1986.
- Gili Gaya, S. *Curso superior de sintaxis española*. Barcelona: Bibliograf, 1981, 13ª edición.
- Guitart, Jorge. "Aspects of Spanish aspect: A new look at the preterite/imperfect distinction", en *Contemporary studies in Romance linguistics*. Ed. Suñer. Washington, D. C.: Georgetown Univ. Press, 1978.
- Langacker, Ronald W. "Remarks on English aspect" en *Tense-aspect: Between semantics and pragmatics. (Typological Studies in Language 1)*. Ed. Paul J. Hopper. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. 1982.
- . *Foundations of cognitive grammar. Vol 1. Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford Univ. Press. 1987.
- . "Nouns and verbs" en *Language*, 63 (1987).
- . *Concept, image, and symbol: the cognitive basis of grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter. 1991.
- . *Foundations of cognitive grammar. Vol 2. Descriptive application*. Stanford: Stanford

- Univ. Press, 1991.
- Porto Dapena, J. A. *El verbo y su conjugación*. Madrid: Arco Libros, 1987.
- Real Academia Española. *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*. Madrid: Espasa Calpe, 1973.
- Reyes, Graciela. "Valores estilísticos del imperfecto" en *Revista de filología española* 70 (1990).
- . "Tiempo, modo, aspecto e intertextualidad" en *Revista española de lingüística* 20 (1990).
- Rojo, Guillermo. "Temporalidad y aspecto en el verbo español" en *Lingüística española actual* 10 (1988).
- . "Relaciones entre temporalidad y aspecto en el verbo español". en *Tiempo y aspecto en español*, Ed. Ignacio Bosque. Madrid: Cátedra, 1990.
- Veiga, Alexandre. "Planteamientos básicos para un análisis funcional de las categorías verbales en español" en *La descripción del verbo español. Verba, anexo 32*. Univ. de Santiago de Compostela, 1990.
- Vendler, Zeno. *Linguistics in philosophy*. Ithaca: Cornell Univ. Press, 1967.
- Wallace, Stephen, "Figure and ground: The interrelationships of linguistic categories" en *Tense-aspect: Between semantics and pragmatics*. Ed. Hopper. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 1982.
- Whitley, M. Stanley *Spanish/English Contrasts*. Washington, D. C.: Georgetown Univ. Press, 1986.